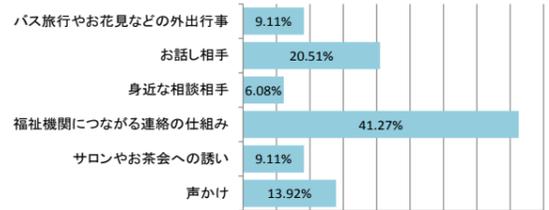


孤独や心細さを解消するために希望すること



町内在住 65 歳以上の人たちを対象として平成 22 年にアンケートを行った結果（有効回答数 1,490 件）。会話をすることや、外出することを希望している人が多いことがわかります。



小地域福祉活動の6地区は地図のように分かれています。福祉新聞は現在3地区だけですが、上富地区・北永井地区、藤久保5・6区でも開始できるように現在準備をすすめています。

5人にひとりが65歳

高齢化が進む日本。私たちの暮らし三芳町も例外ではなく、5人に1人が65歳以上、まちの人口の2割を占めています。さらに今後、その割合は増加していくと考えられ、ひとり暮らしの高齢者への見守りなどが必要となっています。町内で暮らし人たちが支え合う「共助」。その取り組みのひとつとして、「小地域福祉活動」が行われています。

地域にあった暮らしを住民自ら考える

小地域福祉活動は、「地域支え合い活動」の総称で全国的に行われているもので、町内では、6つの地区に分かれ、地域が抱える問題や課題を住民自身が考え、解決していく取り組みを2年前から行っています。

実際にひとり暮らしが多い地区では、会食会を開き、住民同士がひとり暮らしの高齢者を見守る共助の取り組みがされています。

新聞がひとり暮らしの人のココロの架け橋に

小地域福祉活動のうち、住民が「福祉新聞」を発行して、ひとり暮らし

05 小地域福祉活動

地域を住民同士で支え合うココロ



住民の手によって作られ、配布される「福祉新聞」。

楽しくてココロが温くなる町を住民が主体となり、一緒に創る活動を行っています。そのひとつに、「福祉新聞」を作り、ひとり暮らしの高齢者に届ける活動があります。



福島 都久子さん

話が大好き、と話す福島さん。担当する地域の約20人のひとり暮らしの高齢者のお宅に、「おむすび」新聞を届けている。

ひとり暮らしの人の多くは、お話しすることが好きなんです。私も話が大好きなので、新聞を届ける日をいつも「ココロまち」にしています。」

「先日、「おむすび」新聞をひとり暮らしのお宅に届けに伺ったときに「おにぎりはまだ？」と言われたんです。一瞬なんのことかわかりませんでした。おむすび」と「おにぎり」を間違えて覚えていたようで、

たくさんの方との会話が楽しい

「新聞を作る作業を、地域の住民同士が行うことで、交流を深めることができるほか、余暇の時間を有効に利用することができます。この活動の一番の目的は「地域でひとり暮らしの高齢者を見守る」と。毎月、新聞を配達することで、「変化」を読み取ることができます。例えば、ポストに郵便物や新聞があふ

れているお宅があれば、民生委員や行政、社会福祉協議会に報告するなどの対応をします。この新聞を楽しむにしている「ファン」が増えてきたようで、それが、編集者・配達する人の活力となつています。『次の新聞が来ることをココロまちにしている人がいる限り、活動を続けていきたいです。』

福祉新聞をひとり暮らしの人の手に 配達する人の声



↑福祉新聞「おむすび」の編集をパソコンで行っている皆さん。決して得意とは言えないパソコンを操作し、紙面のレイアウトや表現を、納得がいくまで話し合います。

ココロを地域で繋ぐ各地区的活動の様子

町内6つの地区で行われている、小地域福祉活動の様子や内容などを紹介します。

竹間沢・みよし台地区



男性だけで料理をし、会食と会話を楽しむ「ふれあい男の料理」はこの地区独自のサロン。

藤久保5・6区



パッチワークの「陽だまり」、革細工の「オンリークラフト」など、独自の活動を行っている。

藤久保2・3区



書道で地域交流を図る「書道ふれあいサロン」はこの地区だけのオリジナル。写真はバス旅行。

藤久保1・4区



おしゃべりをみんなで楽しむ「ほっとサロン」「なごみサロン」を開催。写真はバス旅行の一コマ。

北永井地区



ふれあいサロン「ふるさと」などを開催し、おしゃべりや合唱、カラオケを楽しんでいる。

上富地区



上富会食会「けやき並木」の皆さん。他にもモンブラン、きぼうなどのサロンを開催。